

27P-am155

江戸時代における薬用ニンジンの商業生産の確立過程に関する考察

○木下 武司¹ (1 帝京大薬)

薬用ニンジン（朝鮮人参、高麗人参）は、古来、中国・朝鮮の伝統医学において珍重されてきたが、原生しない日本でも正倉院御物の中にニンジンが含まれているので、遅くとも奈良時代には渡来していた。平安時代の延喜年間に成立したといわれる延喜式卷三十七「典薬寮」の諸国進年料雑薬の諸国の部に人参の名があるので、当時の日本各地で栽培されていたともいわれる。しかし、これは本格的な栽培ではなく、原産地の朝鮮から種子、苗あるいは生根を取り寄せて植栽した程度のもので持続的生産とはほど遠いものであったと思われる。日本に限らず中国・朝鮮でもニンジンはその他の薬物と比べて格段に貴重品とされ、その使用は支配階層だけに限られていた。中国では、清時代になると消費量が急増し、遼東地方ほかニンジンの主たる産地でニンジンが枯渇し始め、そのため党参をもって代用するようになったことはよく知られているが、それでも栽培等によってニンジンの生産が飛躍的に増大したことを示す確たる証拠は中国・朝鮮のいずれにおいても無い。一方、日本でも江戸時代になってニンジンの消費が急増し、享保時代になると輸入元の朝鮮に対する決済で大量の銀が流出し、当時の幕府の財政が逼迫するほどであったが、皮肉にもニンジンの野生しない日本でニンジンの商業生産が成功し、国内の需要を満たすだけでなく、江戸後期には中国に大量に輸出するほどにまでなった。世界初となるニンジンの商業生産を成功させたのは田村元雄であり、その栽培法は基本的に今日と変わらない。この事実は今日では遍く知られるが、田村が栽培を成功させるにいたったプロセスについては、「(朝鮮) 人参耕作記」で詳細に記述されている割には、ほとんど検討されていない。同耕作記およびここに引用される漢籍の記述を検討した結果を紹介する。